



若い季節

NO.77

平成30年11月発行

〒520-0044 大津市京町4丁目3番28号 滋賀県厚生会館・滋賀県子ども・青少年局分室内
未来にはばたく青少年の健全育成をすすめる民間団体 滋賀県青少年育成県民会議

中学生広場「私の思い2018」



司会



発表者と実行委員



表彰式



伊香立中学校ダンス部



打出中学校吹奏楽部



受付

あいさつ運動

非行防止・環境浄化対策連絡会議

受賞者



会長あいさつ



講演 紅林 伸幸 教授

主な内容

- 滋賀県第21回中学生広場「私の思い2018」 2
- 最優秀賞、優秀賞の発表意見文 3
- 優秀賞の発表意見文、「あいさつ運動感謝状」「県民会議会長感謝状」受賞者一覧 4
- 市から町から 5
- 青少年育成団体関係者交流研修会、非行防止・環境浄化対策連絡会議 6
- 滋賀県青少年育成市町民会議一覧 7
- 正会員（団体）紹介、滋賀県青少年育成県民会議入会のお願い 8



(表彰者と受賞者)

第21回中学生広場「私の思い2018」県広場が、8月18日(土)、大津市和邇文化センターを会場に400人以上の参加を得て開催されました。27,164人の中学生が、日ごろ考えていること、感じていることを作文にし、その中から審査により選ばれた12名の中学生が、大舞台で自分の熱い思いを自分の言葉で発表しました。中学生の豊かな感性と深い思い、心に響く発表に、観客は感動し、惜しみない拍手を送っていました。

また、活動発表では、大津市立伊香立中学校ダンス部の躍動感溢れるダンスや大津市立打出中学校吹奏楽部の爽やかで美しい演奏が披露されました。

意見発表の審査結果は、下表のとおりです。



佐藤 瑠乃さん



岡井 みすずさん



西尾 優羅さん



川本 麻衣さん



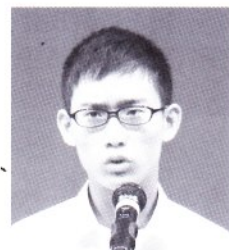
北村 直美さん



塚本 泰生さん



早川 祈月さん



間所 陸斗さん



所 晴生さん



初田 歩夢さん



三橋 奈歩さん



川瀬 野乃香さん

審査結果

賞	発表者		発表テーマ
最優秀賞	大津市立瀬田北中学校	2年 佐藤 瑠乃	私があなたに伝えたいこと
優秀賞	日野町立日野中学校	3年 岡井みすず	平和を守るために
優秀賞	湖南市立石部中学校	3年 西尾 優羅	感謝の気持ちを伝えたい
優良賞	近江八幡市立八幡中学校	2年 川本 麻衣	なくならない女性差別
優良賞	守山市立明富中学校	3年 北村 直美	ドラえものの秘密道具
優良賞	東近江市立五個荘中学校	2年 塚本 泰生	祭りで感じたことから
優良賞	甲賀市立甲賀中学校	3年 早川 祈月	言葉の大切さ
優良賞	長浜市立湖北中学校	3年 間所 陸斗	カイコさんと僕
優良賞	彦根市立彦根中学校	2年 所 晴生	受け継がれるバトン
優良賞	大津市立粟津中学校	3年 初田 歩夢	ペットボトルの行方
優良賞	長浜市立南中学校	3年 三橋 奈歩	生きること
優良賞	大津市立唐崎中学校	3年 川瀬野乃香	キャラに囚われず生きる

★最優秀賞は滋賀県知事賞、優秀賞は滋賀県議会議長賞および滋賀県教育長賞、優良賞は滋賀県県民会議会長賞

平成30年度 第21回滋賀県中学生広場

私の思い2018発表意見文 最優秀・優秀賞

最優秀賞

私があなたに伝えたいこと

大津市立瀬田北中学校 2年 佐藤 瑠乃

「死にたい。」この非常に重い意味を持つ言葉を、私達はあまりにも軽々しく口にします。物事がうまくいかない時、何の違和感もなく、私も簡単につぶやいていました。けれど、ある出来事が、私を変えました。

幼馴染のお兄さんが亡くなったのです。とても優しい方で、笑顔の素敵な人でした。身近な人、私と年齢の変わらない若い人。その死は私を打ちのめしました。幼馴染の気持ちを考えると、「死にたい。」という言葉を手安に用いていた自分を責めました。自分の愚かな行為を、心の底から恥じました。私にとって死は非常に遠い所にあり、未熟な私は本やテレビの中の出来事で、死を理解できていると思込んでいたのです。しかし、現実の死は可哀想や悲しいという分かりやすい感情ではなく、もっと胸苦しい異様な、体が押し潰される程の重いものでした。死の圧倒的な大きさの前には、恐ろしさにただ震えるだけでした。けれど私は初めて、本当の意味で死を考え、生きるということを考え、今の等身大の自分で向き合おうと決心したのです。

中学生である私が死について考える際に、真っ先に思い浮かぶのはいじめです。いじめは心の殺人とも言われます。実際に自殺というあまりにも悲しい結末を招いています。日本は世界の中でも自殺が多く、しかも若年層による自殺が年々増加傾向にある現実を知り驚きました。このことを知り、私の心にある何か湧き上がりました。

私は副生徒会長に立候補しました。以前の私にはありえないことでしたが、自分の殻を打ち破るため、勇気を振り絞り挑戦しました。その結果、生徒会に所属し、希望通り「いじめ防止プロジェクト」という活動ができました。この活動では、生徒会が脚本を書き、出演し、いじめについての映像を制作します。そして教室を回りながら、中学生である私達が、同じ中学生に授業を行い、いじめ撲滅の啓発活動に取り組むのです。全て生徒自身が活動します。大人から与えられるのを待つのではなく、中学生の私達自ら考え行動するのです。生徒会の仲間と取組んだこの活動は、私を大きく成長させ、勇気を持って踏み出す一歩の大切さを教えてくれました。いじめは駄目だと一方的に押し付けるのではなく、一緒に悩み、生命の大切さや考えることが、生きる事の根源を揺さぶるいじめという大きな問題の、解決の糸口になると私は信じています。

私はもう二度と「死にたい。」という言葉は使いません。そして誰にも言うてほしくありません。けれど世界のどこかでは、今日も誰かがこの言葉をつぶやいているかもしれない。いじめ、パワハラ、孤独死、災害、戦争。私たちの周りには、たくさん絶望で溢れ返っています。その絶対的な真っ暗闇の絶望の中では、どんなに強い人も無力かもしれない。希望という光が、一時的に見えなくなることも仕方ないかもしれない。この世界から自分という存在を消すことが、最良の選択だという誤った考えに至るかもしれない。しかし、それは絶対に違います。本当に死にたい人なんて、この世界に一人もいません。みんな本当は家族や友達や大好きな人達と笑いながら、一緒に生きていたいと思っています。誰もが自分の人生を最後まで全うし、生き抜いてみたいはずなんです。

私は声をあげて言いたい。絶望の淵に今立とうとしている人に伝えたい。あなたに生きていてほしい。自分が生きていたいと思う強さと、同じくらい強い強さであなたに生きていてほしい。生きることに背を向けようとしている人に、傍にいるよと呼びかけたい。あなたは一人ではないと叫びたい。私と同じ気持ちを持つ人が、この世の中から一人でも増えてほしいと、心から願ひ続けます。

優秀賞

平和を守るために

日野町立日野中学校 3年 岡井 みすず

私達の暮らす場所が、もし戦争になったら、そう考えると私は怖くてたまらないです。

平和学習をするようになったのは小学校の頃です。その頃の私にとって、戦争は「昔の事」という印象のものでした。資料写真からその悲しさは分かっても、人の焦げる匂いや、泣き叫ぶ声、当時の人が感じていた事すべては想像できませんでした。しかし今私は、平和についてより深く考えるようになったのです。この大きなきっかけとなったのが、ある二つの戦争体験のお話でした。

一つは、私の曾祖父のお話です。この作文がきっかけで、祖父に私の曾祖父が兵隊として硫黄島に行っていたと聞いたときは、とても驚いたし、何とも言えない気分になったのを覚えています。曾祖父は、硫黄島に派遣されてすぐにフィリピンに異動になったそうです。今思えば、玉砕前に異動できたのは不幸中の幸いだったと祖父は言っていました。先駆隊の役目だった曾祖父は、敵視された島民に襲われたり、敵兵の鉄砲があたって右耳がえぐれてしまったといわれています。私は、曾祖父に会ったことはないけれど、そんな所でつらい思いをしていたとは思ってもみなくて、とても悲しい気持ちになりました。それと同時に、私にとって戦争はそれほど遠いものではなかった事を知ったのです。今この日本でも戦争が起こったら、あの戦争資料のような世の中は、簡単に来ってしまうのかもしれない。そう感じると共に、絶対にそうはさせない。絶対に戦争はしたくないと、強く思いました。でも、私はこうも思ったのです。「一度国と国の情勢が傾いたら、一般市民の私に何ができるのだろうか。関係にでもならない限り何もできないんじゃないか。」と。そう考えた時、長崎への修学旅行で聞いたお話を思い出しました。それがもう一つの戦争体験談、被爆者の下平さんのお話です。

下平さんは、十歳の時に被爆されました。防空壕で、妹さんと一緒に何とか助かったそうですが、外にいた家族の方は、焦げた服だけが見つかったり、助かっている熱線の影響ですぐに亡くなられたりしたそうです。妹さんも、熱線と放射線でお腹の辺りが腐ってしまい、蛆が湧いていたそうです。頼れる大人も居らず子どもだけで暮らす中、ある日、線路に女の子が身を投げたという知らせが届きました。まさかと思いついて見に行くと、そこには四肢がばらばらになった妹さんのご遺体があったそうです。妹さんはお腹の事で虐められ、耐え切れなくなっていたのだらうと、下平さんは仰っていました。一度も死のうらと思つた。一そう言った下平さんはしかし、絶対に生きなければと思ったそうです。それはなぜだったのか？と聞いてみると、同じ苦しみを二度と味わって欲しくないから。次の世代へ伝えなければいけないという責務を感じたからだと言ったのです。自分が一番辛いときに後世への責任を持つとした事に驚いたし、本当に尊敬しました。そして、大切な事に気づいたのです。それは、私でも平和は守れるという事です。

下平さんは、平和の原点は「人の痛みを分る心を持つこと」だと教えてくれました。だから、色々な体験を聞いて怖かったらどうかな、つらかったらどうかなと想像した私と同じように、戦争を知らない人にそれを聞いて想像してもらえば、平和を守ろうとする人の輪が、もっと大きくなるのだと分かったのです。知らないという事は、最も恐れるべき事だと私は思います。世界ではまだ、戦争によって苦しむ人が沢山います。だから、私たちにはまだ、知るべき事が沢山あるのです。

それを思い出し、「私は、何でもできないわけじゃない。自分にできる事をしよう。」そう思い、それを教えてくれた祖父や下平さん、戦争でつらい思いをした人達の思いを無駄にしないように、私は今もう一度、平和を守ろうと決心しました。

平成30年度 第21回滋賀県中学生広場

優秀賞

感謝の気持ちを伝えたい

湖南市立石部中学校 3年 西尾 優羅

父と母が離婚したのは、わたしがまだろくにしゃべれないころでした。

こんなふう話し始めると、不幸な家族の話かと、構える人がいるかもしれません。確かに、父方の祖父母に育てられながら父とはほとんど会えず、会える時があればいつも怒られ、楽しく遊んだ記憶はないと言うと、不幸を背負った少女の物語に聞こえるかもしれません。しかし、わたしは父に伝えたいのです。「いつもありがとう」。

ただ、そんな気持ちになるまでに長い時間が必要だったのも事実です。友達と遊んでいて、帰宅がちょっと遅くなっただけで怒られる。ひじをついてごはんを食べていたら、また注意。そんなことが繰り返されると、母と呼べる人がそばにいてくれたらと、何度も考えたことがあります。「優羅はパパに嫌われてるのかな」と悩んだこともありました。

でも、ある時、「パパの幸せって何？」と聞いたことがありました。その答えは、

「優羅が笑ってる時が一番幸せやわ」

素直にうれしかった、わたしのことを本当に大切に思ってくれてると、感激しました。

父が家にいないのは、わたしのために仕事をがんばってくれているから。そして、怒るのもわたしを思っていることでした。出会った人から「あなたは礼儀正しいね」とほめられることがわたしの自慢の一つなのですが、こんなふう胸を張れるのは、父が自分の時間をわたしのために割いてくれたからでした。

それからのわたしは、これまで以上に言葉遣いに気をつけるようになりました。そして、友達のように気づけるように

なろうと努力をするようにもなりました。

中学生になり、新しい家族が増えて、わたしの考えはさらに変わってきています。

テレビのドラマでよくあるように「わたしのママは一人しかいない！」と、最初は父の再婚に反対しました。しかし、部活や勉強、友達関係のことで悩むわたしの相談にのってくれるのは今の母であり、最後まで再婚に反対しなくてよかったと思っています。

一歳になった妹がカタコトで話すようになり、歩き始めると、その一つ一つに拍手が起こり、家族に笑顔が広がります。そして「優羅もこんな時あったなあ」と言っているのを聞くと、わたしもみんなの愛情をいっぱい受けて育てられたんだと感じます。

それでも、つい「うるさいねん！」「ウザイわ！」と口走ってしまうわたしがいます。やらなければいけないとわかっているながら、あともわしにしている自分を見透かされた焦りの表れです。本当は、「いやなわたし」と後悔しているのです。

そんなわたしが悩みを抱えて部屋で泣き、それでも家族には何も言っていないという時がありました。いつもどおり、わたしはみんなと一緒に笑って楽しく過ごしているつもりでしたが、家族みんなに「何かあった？」「一人で抱え込んだらあかんぞ」「悩んでることあったら相談しなよ」と言われ、ちょっと赤くなったわたしの目を見逃さずにくれたことに、とつてもとつても感謝しました。

そんな感謝の気持ちを家族に返す、それが当たり前かもしれない。しかし、わたしは別の選択をしようと思っています。それは、わたしの周りには友達一人ひとりをしっかり見て、悩んでいたりしんどくなっている人がいたら、横にいてだけでもいいから、自分が見逃さない人になることです。

それが、わたしに対する、父をはじめとする家族の願いだと感じるからです。